



北海道白老町視察報告書

松浦武四郎と仙台藩及びアイヌ民族との関係性の考察

山本 節

2012/11/26

松阪市議会議長

中森 弘幸 様

平成24年11月26日

報告者 松阪市議会議員 山本 節

視察報告書

今回、下記の通り行政視察を実施致しましたのでその内容等を報告いたします。

記

- | | |
|---------|---|
| 1、視察の日程 | 平成24年11月15日～16日 |
| 2、視察先 | 北海道白老町 白老町企画振興部企画政策課
アイヌ民族博物館 |
| 3、視察参加者 | 山本 節 |
| 4、視察項目 | アイヌ民族国立博物館について
松浦武四郎とアイヌ民族について
アイヌ民族博物館現地視察 |
| 5 視察内容 | 概要及び所感（要点のみ記載） |

■ 概要

・「民族共生の象徴となる空間」基本構想について

緑の湖畔に息づくアイヌ文化を次の世代へ

民族共生の象徴となる空間の意義と役割

民族共生の象徴となる空間『民族共生の象徴となる空間』基本構想は、平成 21年(2009)7月に内閣官房長官に提出された「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」報告で、今後のアイヌ政策の「扇の要」となる政策として提言されました。

この、象徴空間は先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、アイヌ文化が直面している課題に対応しつつ我が国が将来に向け多様で豊かな文化や異なる民族との共生を尊重する社会を形成するためのシンボルとなるものです。

象徴空間は緑豊かな北海道白老町のポロト湖畔に整備され、アイヌ文化復興のナショナルセンターとして次のような機能を備えることが期待されます。

【象徴空間の具体的な機能】

展示等機能

* 先住民族としてのアイヌの歴史・文化等の総合的・一体的な展示、実践的な調査研究、伝承者等の人材育成

* 国立を含め、国が主体的に文化施設(博物館等)を整備

体験・交流機能

* 文化伝承・体験学習活動(伝統的家屋・山・海川の活用)

* 国内外の文化との交流(海外の先住民族文化との交流等)

文化施設周辺の公園機能

* 豊かな自然を活用した憩いの場等の提供

アイヌの精神文化を尊重する機能

* 伝統的儀式が行える広場等

* 大学等にあるアイヌ人骨のうち、遺族等への返還の目途が立たないものは国が主導して象徴空間に集約し、尊厳ある慰霊に配慮。

今後の取組・検討課題等

* 博物館に係る基本構想について、平成25年夏を目途に一定の結論

* 文化伝承・人材育成・体験交流活動等の具体的な取組内容について、有識者や若手を含むアイヌ等の声を聴きつつ、平成 25年夏を目途に一定の結論

* 整備・管理運営手法の在り方等について、平成25年度中を目途に一定の結論

* (財)アイヌ民族博物館の人材・知見を象徴空間の管理運営に最大限活用

* 国と関係自治体(白老町)等の連携・協力を強化

* アイヌ人骨の返還や集約に向けた進め方等について検討促進

アイヌ民族博物館

アイヌ民族博物館(ポロトコタン)は、アイヌの文化遺産を保存公開するために、1965年白老市街

地にあったアイヌ集落をポロト湖畔に移設・復元した野外博物館です。

5軒のチセ(茅葺きの家)や博物館・植物園・飼育舎などからなり、ポロトコタンの名前で親しまれています。

・松浦武四郎とアイヌ民族について

その昔、この広い北海道は私達の先祖の自由な天地であった。

・「アイヌの歴史」

アイヌは日本国に暮らす民族のひとつで、東北地方の北部から北海道、千島列島、樺太(今のサハリン)といった地域に古くから暮らしていました。

明治時代になってから、日本民族が入植をし、隣り合って暮らすようになりました。

そこで、先に暮らしていた人達を先住民族と呼んでいました。

アイヌ民族の土地には、文字を使った記録ができる前から人びとが暮らしていました。

約2万年前の石器、1万年前の人骨が見つかっています。この人骨は現在のアイヌ民族の先祖らしく、この頃までにはアイヌが北海道に来ていたことがわかります。

世界のどの民族でもそうであるように、アイヌの歴史も周りの民族との関わりなかで作られてきました。

樺太から先にはニヴフ、ウイльта、ウリチ、ナナイ、モンゴル、漢人、満州人といった大陸の民族がいました。千島列島の先にはカムチャツカ半島があり、イテリメンやコリヤーク、チュクチが暮らしていたほか、時代が下るとロシア人が入植してきました。もちろん本州の和人も長い交流の歴史があります。

アイヌは身の周りの環境をよく知り、そこから手に入る魚や海草、動物の肉と皮、ワシの羽根などによって周囲の民族と取引をしていた。また、他の民族を介して中国製品を手に入れそれを本州に売る「仲介交易」と呼ばれる取引でありました。北海道産の魚からつくった肥やしや近畿地方の綿花を育て木綿製品になってアイヌにもたされるなど、お互いの生活に大きな変化を生みだすきっかけになりました。

初期の交易は、お互いに自由に行き来をして、アイヌは船を操って函館や東北地方まで渡り、自由に相手を選んでいました。

やがて、函館付近の和人が勢力を持ち、松前藩となっていく中で交易には多くの制約が課せられました。東北地方へ渡る事も禁じられ、やがて函館にも行く事が禁じられました。

それぞれの地域に和人が出向いて交易を行うようになると決まった相手としか取り引きできなくなり多くの不正が行われました。「アイヌ勘定」やメノコ勘定という言葉があります。

アイヌは数を数えることができなかったので「はじめ、1、2・・・10、終わり」と数えて交易品を騙し取った」と言う笑い話で、アイヌをこっけいに扱った北海道の民間伝承です。明治時代にアイヌ勘定をされた女性の思い出話が残っていますが、実際にはウソとわかっているにもかかわらず文句を言わせないのだそうで、とても悔しかったそうです。

この様な事情から、物語に語られるような幸せな交易の時代もやがて終わりを迎えます、また、中

国やロシアと行き来がしやすい地域では和人よりもそちらの民族と親しくした人達もいました。明治時代になると日本政府はそれまで蝦夷地と呼んでいた地域を、新たに「北海道」と言う名前にして植民政策を始めました。

アイヌは日本国民とされましたが制度の上でも今日まで続くいろいろな不平等があります。千島列島と樺太はロシアとの間で奪い合いとなり、何度も国境が変わりました。アイヌは国境によって、また領土内の移住によって暮らす場所を変えられ、仕事も言葉も新しいものに変えなければなりません。先祖伝来の暮らしから異民族の名前と言葉を使い、異民族の神に参り異民族の間で暮らす事となりました。

この時代を乗り越えるのは、今の私達には想像もできないほど大変なことだったのでは。そうした新しい暮らしのなかでも、アイヌの言葉や物語、歌を後生に伝えようと意識して努力をしている人もいます。

・北海道の名付け親「松浦武四郎」

松浦武四郎(1818～1888没)といえば幕末から明治維新にかけて日本史においても激動の時代に生きた人物で、伊勢の国小野江村、現在は松阪市小野江町に生まれ蝦夷の詳細な地図を作成し北海道と地名をつけた探検家であります。

今も旧家は伊勢街道沿いにあり、旧家を眺めていますと昔の武四郎の人物像が思いうかべられる所でもあります。

今でこそ北海道といえば観光の名所であり山海の珍味が楽しんでもらい北の観光地として本土とはちがった土地柄は風情もあり何回ともなく訪れたい北海道ではと思われる。

江戸時代では未開の土地「蝦夷地」と呼ばれ足を踏み入れる人々は僅かだったと言います。

松浦武四郎は伊能忠敬氏等の後輩にあたり先輩方が記した沿岸部の測量結果を使い内陸部の空白地を地図に書き記していったと書かれています。

6度に渡り蝦夷地を調査、現住民のアイヌ人の人々の協力を得て各地を巡り歩きました。

今ではその資料は松阪市小野江町の松浦武四郎記念館に国の重要文化財として保存をされている。

指定をされたのは蝦夷日誌をはじめ150冊以上を数える、1845年～58年の6度の蝦夷地調査記録、アイヌ語で書かれた大型地図・東西蝦夷山川地理取調図・アイヌ文化を紹介する蝦夷漫画のほか、収集した小刀や玉飾りなどアイヌ民族資料も含まれている。

また、記録調査では松前藩がアイヌ民族に課した強制労働や迫害の様子が記され武四郎がアイヌ民族の命を救ってほしいと幕府に訴える記述など北海道の歴史・アイヌ民族の歴史や文化を知る上で武四郎がアイヌ民族とかわかってきた様子がわかる貴重な資料である。

・松浦武四郎と白老元陣屋

武四郎と白老元陣屋とは、蝦夷地開発という歴史的命題のもと深い係わりを持っている。

言うまでもなく武四郎は北海道、各群等の名付け親として有名であるばかりでなく、北海道開発史上忘れる事のできない先駆的業績の輝く人である、明治2年辞官する時開拓判官大主典の要職

にあった。

武四郎の半生は6回に及ぶ蝦夷地探検と膨大な蝦夷地関係の著作でもわかるように蝦夷地に光を与える為に精魂を捧げたとある。

この武四郎と白老元陣屋を見込み、やがて自身も御備頭として嗣子五郎を伴って着陣している、三好監物とは盟友の間柄であり共に勤王派で蝦夷開拓を語り合う仲である。

安政4年武四郎は白老会所に泊まった。監物は白老に着陣して未だ日が浅く3ヶ月が経ったばかりで談論は風発し武四郎は大いに共鳴し賞讃した。

・白老元陣屋とは

白老川とその支流ウトカンベツ川に挟まれ丘陵を背にして、仙台藩白老元陣屋がある。安政3年白老へ着いた藩士達は陣屋建設にとりかかり年末には一応の完成をみた。

面積は5.8ヘクタール外曲輪と内曲輪を円形に巡らし本陣・勘定所・兵具庫・米蔵・長屋・稽古場などが配置された。

少し離れた兵陵に仙台から勧請した塩釜神社と愛宕神社を建立した。

安政6年、かねて幕府に願い出ていた領地拝領が許され白老、十勝など6場所が仙台藩領となった、以降、代官も任命されて民政にもあたるようになった。

陣屋には常時150名程の士卒が駐屯していた。半年から1年間の勤務で大番組などから選ばれたり、藩士の次・三男・足軽が中心となっていた。これらの者には若干の下賜金と扶持米が与えられたが、支度金や道中の費用は個人持ちでした。

配属された火器は火縄銃・大筒3門があり、幸いにして外国船との交戦はなく、これらは旧式の和砲で実戦には役にたたなかったと思われる。

白老は北海道では温暖気候であるが藩士たちにとっては経験したことのない極寒の地であった、加えて新鮮な野菜の補給がままならなかった事もあり病に倒れる者が多く藩では医師を派遣したが、その手当てのいかもなく死亡した者は20数名を数えた。

数多くの苦労を重ねながら警備にあたっていたが明治元年戊辰戦争がぼつ発し官軍の来攻をした藩士たちは仙台へ撤退し、12年間の幕を閉じた。

・アイヌ古式舞踊

白老で伝承するアイヌ古式舞踊は、1984年国の重要無形文化財に指定されました。儀式で踊られるイオマンテリムセ(熊の霊送りの踊り)やアイヌの楽器ムックリ(口琴)・ウポポ(座り歌)イフンケ(子守歌)・サロルンチカプリムセ(鶴の舞)・雄壮なエムシリムセ(剣の舞)など、北方の大自然を思わせる歌舞が次々と繰り広げられています。

■所感

・「民族共生の象徴となる空間」基本構想について

北海道全土における『民族共生の象徴となる空間』基本構想の要として、白老町に



あるアイヌ民族博物館周辺の広大な国有林（山養林）をアイヌ民族文化施設として国立博物館建設用地に選定し、アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとしてアイヌの歴史や文化を多角的に伝承・共有可能たらしめるため、博物館・伝統家屋群・工房等の施設を備え、異なる民族が互いに尊重し共生する社会のシンボリック空間整備に着手する。

図2：ポロト湖畔周辺図

象徴空間はポロト湖畔を中心とし、中核・関連区域で構成され、①展示・調査研究②文化伝承・人材育成③体験交流④情報発信⑤公園⑥精神文化尊重の6コンセプトの機能を持たせ、アイヌ民族の持つ自然観・世界観を広く学べる環境の整備を行う。

北海道を広く探検調査し、各地の北海道はもとより各地の地名の名付け親であり、またアイヌ民族にとっては恩人的な存在である松浦武四郎翁を同基本構想の中に組み込めるよう、松阪市としてもアプローチを行うべきと考える。



図3：ポロト湖畔のゾーニングイメージ

・白老町立 仙台藩白老元陣屋資料館



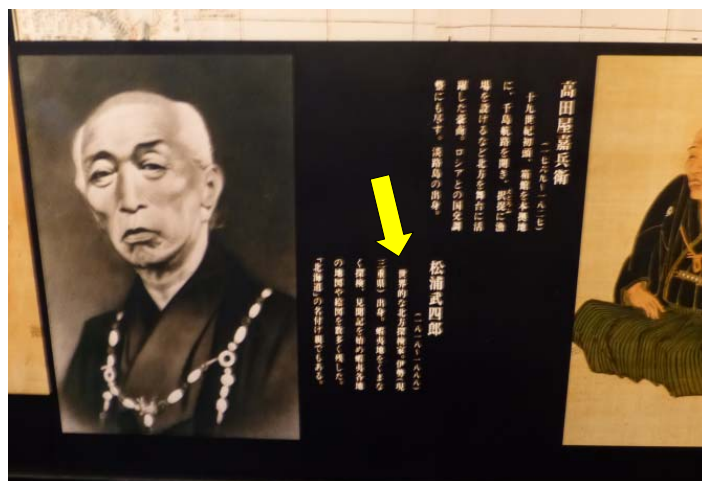
同資料館を拠点に、仙台藩白老元陣屋資料館友の会（川西政幸会長）他2名の会員さんから同会実施している展示解説・資料館イベントサポート・勉強研修会等に関する活動事業についての説明と苦勞談等、ヒアリングさせていただきました。

同資料館が発行している「仙台陣屋かわら版」（平

成 24 年 11 月現在で93号目)を拝見しましたが、同仙台藩の資料に基づく歴史的事実やイベント等の報告など、事細かく仙台藩に係わる記述は毎版テーマを設定し、町民各世帯に配布し、郷土の歴史や偉人の行動学等、普遍たらしめる取り組みを認識したとき、松浦武四郎記念館でも市民に対する更なる偉人啓発に力点を置くべきと感じる。

同資料館展示物案内板に松浦武四郎プロフィールに「世界的な北方探検家」との説明文が添えられている。

松浦武四郎翁の偉大な業績に関係する北海道民とその偉人を生み出した地である三重県民、松阪市民の松浦武四郎翁に対する知名度の低さからして、尊敬念の違いは驚くばかりである。とりわけ



松阪市における武四郎翁の知名度の低さは、尊敬念どころか認識不足の現状を思う時、官民をして世界レベルの偉人である松浦武四郎翁の偉業に関する啓発や白老町はじめ関係する北海道各地との今後の交流イベント等を模索するべきであり期待するところである。

・松浦武四郎とアイヌ民族について

松浦武四郎翁の偉大な功績はアイヌ民族との信頼関係の中で構築された偉業である。

松浦武四郎翁が6度にわたって北海道を探検するなか、アイヌ先住民の居住地はもとより未開の地に足を踏み入れるにあたり、アイヌ先住民との連携がなければ武四郎翁の偉業が成し遂げられなかったとも云える。武四郎翁におけるアイヌ民族への全幅の信頼こそ、アイヌ民族との現地調査における、身を賭しての案内等の献身的な行動をもたらしたともいえ、この武四郎翁における心の作用も評価の一つである。

換言すればこの武四郎翁とアイヌ先住民との心からの相互信頼における交流の賜物が武四郎翁の偉業を達成したと云っても過言ではない。武四郎翁とアイヌ民族の精神の考察を深めるべきだと思われる。



一方、アイヌ民族の生活空間である北海道の広大かつ雄大な自然界における狩猟・採集に係わり、自然からもたらされる衣食住に係わる万物には神が宿り大切に扱うという思想は本来の日本人の原点とも考えられる。このことから現代における人間関係はもとより、自然に対する考え方の原点回帰すべく、いじめ等、諸々の人間関係における他者との

係わり、ひいては自然への感謝の精神情勢等を鑑みた時、アイヌ民族から学ぶべき事柄の多さを実感する。

北海道各地では、教育現場における実践的な試みとして、アイヌ民族をめぐる動向やアイヌ民族の歴史・文化等に関して指導に必要な基本的事項についてまとめるとともに、授業実践や体験的活動等を行いアイヌ民族への理解を深めるだけでなく、彼らの行動を通じて生命尊厳や自然を大切に考える考え方等、本来の人間性を取り戻す試みがなされている。

松阪市においては今後、松浦武四郎翁の功績の顕彰に留まらず、武四郎翁の精神とアイヌ民族の精神性をさらに検証し、それら両者の精神性の普及を目指すべきだと考えます。

重ねて、松阪市内はもとより県内にも松浦武四郎翁の偉人としての人間性と偉業の両面の探求と、そしてアイヌ民族の日本人として本来あるべき人間性の考察を深め、普遍たらしめることが必要だと考える。

③ アイヌの人たちの暮らし

単元の初めに、上の図を使ってアイヌの人たちが何をしているのかを考えたり、下のパーツを貼りつけたりする活動を行う。アイヌの人たちが住居を構えた場所、生活に必要な物を得る方法のイメージや課題をもって学習に入ることができる。単元では、遊び、狩猟・採集・漁労についての学習するので、単元を通して図を活用できる。単元の最後には、アイヌの人たちが自然とともに生き、自然を大切にしていたらと思うと、それが地名にも表れていることをまとめる。



以上

【参考資料】

- ・「民族共生の象徴となる空間」の概要

<http://www.mlit.go.jp/common/000164473.pdf#search='%E6%B0%91%E6%97%8F%E5%85%B1%E7%94%9F%E3%81%AE%E8%B1%A1%E5%BE%B4%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%82%8B%E7%A9%BA%E9%96%93'>

- ・「民族共生の象徴となる空間」基本構想

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/pdf/point20120731.pdf#search='%E6%B0%91%E6%97%8F%E5%85%B1%E7%94%9F%E3%81%AE%E8%B1%A1%E5%BE%B4%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%82%8B%E7%A9%BA%E9%96%93'>

- ・札幌市 アイヌ民族に関する教育

http://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/education/ainu/ainu_minzoku.html